



リトミック的な要素も入れ込み、生徒にあったプログラムを展開。先生のネタ帳が分厚かった



鍵盤の蓋を閉めた状態で、指の形を確認する導入部。ボールの握りなども効果的という



2歳8ヵ月からの7年間で大変な重さになった「おけいこノート」。努力の成果だ



震災時に石巻からレッスンに来られていた親子。車で4時間かけて戻られたという



国内外から本会にいただいた支援金で、電子ピアノを購入することができた中学生



年に1回の発表会(写真は2014年7月)。この他、サロンコンサート風に盛り上がるクリスマス会や春のグループレッスンなども行なう



小学6年の時に、モーツァルトの協奏曲「戴冠式」を佐藤先生の娘さんの伴奏で、ソロ演奏(手前)



高校時代の菅野先生(中央)。水戸奏曲「戴冠式」を佐藤先生の娘さんの伴奏で、ソロ演奏(手前)

入っていたので、音大特有の分析的な研究に慣れるには時間が必要でした。大学卒業まで、佐藤先生クラスの発表会にも出演し、その成長ぶりを後輩たちに伝えた。その後、一般企業に就職するも、1年で退社。子どもの頃の夢を果たそうとピアノ研究グループに参加。楽器特約店に勤務するかたわら、スズキの指導法を指導者の視点から学び直した。結婚後、仙台で住まいを新築した7年前から、教室を稼働。4年前の東日本大震災では、教室のある仙台の内陸部でも、ピアノが大きく動くほど揺れた。ちょうど玄関で生徒さんを迎えた時で、レッスン室におられなかったのが

幸いした。レッスンを再開されたのは、全員の無事が確認できた4月になってから。(※)菅野先生が日々のレッスンで目指しているのは、いずれ巣立つてゆく時に「スズキで育つてよかった」と感じてもらえること。「親になつて帰ってくる佐藤先生クラスのような姿が目標です。そして「音の育ちは、心の育ち」のように、目には見えないけれど、音に込められた精神的な育ちを大切にしたいと願う。毎月発行の手作り通信「ALL EGRESS」には、先輩お母さんとしての経験談などが惜しみなく紹介されていて、母親たちからの信頼が厚い。

# ★ 教室めぐり 43 宮城

・仙台市泉区将監 7-10-13  
tel.022-773-0390



一人ひとりのレッスンを記録したオリジナルの「ネタ帳」。7年分のレッスンがすべて入っていて、電話帳のように分厚くなっていった

鹿島臨海工業地帯に植音が鳴り響いていた頃、「まるで野生児でしゃた」という菅野由美先生は野山を駆け回るのが大好きな少女だった。ひとたび社宅の大家さんの娘さんが練習するピアノの音が聴こえると、泥だらけの格好で、じつと耳を澄ます一面も。「どう育てたらいいのだろう」と悩んでおられたお母様は、その頃、鹿島で開かれた鈴木鎮一先生の講演会に夢をもすがる思いで駆けつけた。長野出身のお母様は、スズキの評判を聞いていた。講演会で鹿嶋支部の佐藤ケイ子先生(関東地区ピアノ科指導者の生徒さんの演奏も聴き、「これしかない!」と決断。講演の感動や子育てへの思いを手紙に託し、佐藤先生に送った。由美さんが4歳

の頃だ。「母の努力と苦労は大変だったはずですよ。なにしろ10分程度させるのも一苦労な私でしたから。それでも、ひたすら佐藤先生の言葉を信じてがんばった母を、先生は今でもよく褒めてくださいます」佐藤先生は、理想とする音や表現、フレーズの取り方などに高い目標を掲げておられた。「リパッティ先生やギーゼキング先生の演奏より、ちょっと上手にね」と伺えば、「私もそのレベルで弾きたい」と考えるようになったのが小学校の後半。その頃、イタリア協奏曲を演奏した第11回関東ピアノ科卒業式の控え室で、緊張感から涙が一粒こぼれた瞬間があった。一人ひとりを激励されていた鈴木先生から「ほら、食べなさい」と、い

ただいたのが丸い餡。「きつと甘い音が出るからね。まさにその通りで、「その時が、一番うまく弾けました」と菅野先生は、今も懐かしむ。そして、「ピアノの先生になりたい、それも佐藤先生のような」と思っただのも、この頃だった。夏期学校では、当時行なわれていた「夜のコンサート」に出演。また、全国大会(現?ランドコンサート)に併設して開催された卒業式では、ピアノ科代表として、鈴木先生から卒業証書をいただいたことも。中学3年で全課程を卒業し、高校2年からは、地元の普通科の進学校に在籍しながら、東京の音楽大学の先生のレッスンに通い、合格。「スズキで最初の段階から理想とする音やイントネーションが身体に

## 親になつても戻りたくなる教室を目指したい

ピアノ科 菅野由美先生クラス

